SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

フランコ期における民衆の表象：カルロス・サウラ、La Cazaにおけるうさぎ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-04-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大原, 志麻 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006540

フランコ期における民衆の表象
—カルロス・サウラ、*La Caza*におけるうさぎ—

大　原　志　麻

1．はじめに

カルロス・サウラは、スペイン映画の巨匠であり、日本で2012年2月11日からロードショーの*Flamenco, Flamenco*のような、フランコ期以降に制作されたフラメンコ三部作などで知られている。世代的には、三人のB、ブニュエル、ベルランガ、バルデムに続く監督であるとされている。今日もなお多作なサウラであるが、その代表作は、フランコ時代の三作目となる1966年の*La Caza*[1](狩り)であり、サウラ初期の作品にして最後の傑作ともいえる。日本では1984年のスペイン映画祭で紹介されており、高く評価されている[2]。しかし*La Caza*の重要な要素である表象については、言及されていない。サウラの映画はベルランガのようなwell-madeではなく、現実を複雑で過度のシンボリズム[3]で描くものである。そのためスペインにおける先行研究では、*La Caza*における表象の解釈が主なテーマとなっている。しかし、狩猟が内戦を、うさぎは共和派兵士であるという解釈に概ね限られており、フランコ期の複雑な社会的背景との連関、そして中心となるうさぎやフェレットなどの表象についてはまだ研究の余地があるといえる。本稿ではうさぎの表象を定義し、そして追憶（内戦期）と現実（60年代のフランコ体制）が混ざり合うサウラ独特の手法によって表現されるシーンを、当時の政治的社会的背景から詳細に紐解くことによって、スペイン映画の傑作といわれる*La Caza*の意味するところを明らかにし、当時のスペイン文化と社会への理解を深めたい。

---

[1] Saura, C., *La Caza*, España, 1966.
[2] 『キネマ旬報』903、105頁。
[3] Torres, A.M., *Diccionario Cine español*, Espasa, 1996, pp.141-142.

2．うさぎの表象

a）日本におけるうさぎの表象

*La Caza*はうさぎ狩りが主題であり、うさぎが表象の中心となっている。そこで表象されるうさぎは、日本におけるイメージとは大いに異なる。洋の東西を問わず、うさぎは人間を脅かさないことから今日愛すべきキャラクターであるとされている。日本では古くから『古事記』[4]と『今昔物語』[5]におけるうさぎが有名である。『因幡の白兎』に表れる白うさぎは、日本の北部にのみ生息する珍しいもので、海の沖からやって来る渡来人を表す。波を渡るうさぎは、ワニを排した波兎模様、江戸時代の火除けのお守り、謡曲竹生島になっている。皮が剥がれる身体損傷は新しい人格への脱皮と再生を表し、赤裸になったうさぎを大国主神が治癒させ、稲羽（因幡）の白うさぎは神として、大国主神に、汝こそ八上比売を嫁にすると託宣することからアニミズムの典型でもある。白い色は白馬、白蛇、白鳥、白虎など神性を有し、原始古代では聖獣とみなされ、白うさぎは霊と再生のシンボルである。しかし、原始氏族社会における、作物を荒らす兎への敵対視もあり、北にしかいない白うさぎが隠岐（沖）を渡るという異常行動、それがワニに赤裸にされるところから、信仰と得体のしれない外来に対する敵意が綯交ぜとなっている。

『今昔物語』の月のうさぎでは、帝釈天は兎の慈悲深い菩薩行を人々に知らせるために遺骨を月に安置した。帝釈天は東方の守護神で、東すなわち卯の方角と結び付けられる。東は満月が昇る方角で、浄土とする他界観と重なる。これが西王母伝説と結びついて十五夜の秋と重なり、秋草とうさぎの図柄にイメージが拡大していく。インド・中国では、うさぎは月の中に住み、長生きの薬を臼でつく、地上性を超越した神性を備え、道教の神仙界に遊ぶ聖獣である。

うさぎは夜行性なので月、そして女性と連関する。群れを成さず一匹で行動する孤独性、定住せず、漂泊性が強く、歩行もでき、夜単独行動をし、藪陰に棲んで見つかりにくく、また「脱兎の如く」といわれる俊敏性、姿をすぐ消す瞬時性から神の示現と重ねられる。野山のうさぎが里に飛び出し、素早く山に去る様から、自然と文化の橋渡し役を意味するようになり、またうさぎの形の美しさから人間の死後の姿に重ねられ山中他界観からの霊性が認められる。毛が生え、耳が長く、足が前後長短不ぞろい、ヒゲがある異形性、白色という聖

[4] 「因幡の白兎」『古事記』岩波書店、1982年。
[5] 「月のうさぎ」『今昔物語』經濟雜誌社、1901年。

色性からも山の神とされている。また、くるくる回るうさぎは、輪廻転生を表す呪術的再生行為と同一視され[6]、日本人が神観念を抱く対象とするものの生態の特性に基本的要因を具えているといえる。また繁殖力旺盛で多産なうさぎは産神とされ、妊婦が食すると神への冒涜とされ、子供の上唇がなくなるとされた。また、兎の皮を剥がして野に放つと悪報が来るといわれている。

うさぎの神性は、貴族の間で特に認められ、鳥獣戯画やうさぎを祀った多くの神社に表わされている。大嘗祭は、卯の花であるウツギの白い花が咲く卯の月、卯の日が神聖視され選ばれる。夜と朝の境目の聖なる時間である午前六時の卯の刻が公務員の出勤時間とされた[7]。うさぎには薬としての効能があるとされ、寒なので、熱性による渇きを止め、子供の疱瘡を治すとされ、徳川将軍家では毎年正月に兎の吸い物が膳に据えられていた。

しかしうさぎには、貴賤や都市と農村の両様の見方がある。農村では、豆畑、蕎麦畑がうさぎの害に悩まされていた。またうさぎが夜行性のため、昼間山の中で眠っている長閑なうさぎは、明治時代以降に広まった『うさぎと亀』にみられるように労働にあけくれる農民には羨ましい存在でもある。うさぎは狡兎と呼ばれ、作物を荒らしてすばやく逃げる利口者であり、敏捷で狡猾な性格としてうさぎが描かれたのが『かちかち山』である。そこでのうさぎは裁き手であり策略家な面と女性性を併せ持っている[8]。また食糞の習性から邪淫な生き物であるともいわれ、聖俗両様のうさぎ観が展開していった。

b）ヨーロッパにおけるうさぎの表象

ヨーロッパにおけるうさぎの表象も日本と共通する側面がある。うさぎは西洋でも古代世界において豊穣、再生のシンボルとされた。死後再生するエジプトの神オシリスの標章がうさぎであり、復活再生を見る古代の習慣が復活祭のうさぎにつながる。アングロ・サクソンの多産と豊穣をつかさどる春の女神エオストレの化身あるいは使いがウサギである[9]。春分のエオストレすなわちイースターの語源となる祝祭では野うさぎ（イースターバニー）が儀式に用いられていた。古代人の世界観の中で、月はうさぎに連関し、神話的イメージを持つ。

ラ・フォンテーヌやイソップの『うさぎと亀』型の説話では、うさぎの良性

---

[6] 赤田光男『ウサギの日本文化史』世界思想社、1997年。

[7] 歴博フォーラム「新春　うさぎばなし」2011年、1月22日。

[8] 佐藤隆之「太宰治「カチカチ山」（『お伽草子』）論―兎・狸・父・娘の造形・役割」『芸術至上主義文芸』36, 117-126頁。

[9] 益田朋幸『ピーターラビットの謎：キリスト教図像学への招待、東京書籍、1997年。

や聖性は影をひそめ、怠け者として描かれ、無力ゆえに策略を用いる。「うさぎと逃げながら猟犬と狩りをする。両方の味方をする。（信念節操のない人）」[10]という諺にも無力で策略家としてのうさぎが表れている。スペインの諺では「うさぎと策略（うそ、ごまかし）は同じだけ素早く作り出される」[11]があり、うさぎの策略と繁殖力がかけられている。「魚は口がもとで死ぬ、うさぎは歯がもとで捕らえられる（口は禍の元）」[12]、「思いもしなかった所からうさぎが跳び出す（藪から棒）」[13]などや、また『不思議の国のアリス』や『ハーヴェイ』[14]などに登場するうさぎのように、秩序からはずれた役目をあてがわれ、あわて者、怠け者、異界へ誘う者、トリックスターとして描かれることも多い。また、弱いうさぎはイソップ童話で、仲裁者、裁き手になる。ブーヴィエによるとうさぎは地上で一番弱いものだが、死の世界では逆転して一番強くなり、月でも動物たちの主となる[15]。魔女集会で森のへりや月夜に飛び跳ねているうさぎには魔性も付与されるが、日本のうさぎはそのような観念がない。インド、中国、日本では魔性のうさぎがないという点が大きくヨーロッパと異なる。

日本と同様うさぎは淫乱の表象でもある。キリスト教美術においては、繁殖の速さから多情の象徴として否定的に扱われることが多い。聖母の足元に野うさぎがいれば、それは聖母が無原罪であり、性欲を克服していることを表す。ティツィアーノのLa virgen del conejo（うさぎのマリア）での白うさぎはマリアが性欲を克服した存在であることを示しているが、複数いるとエロティックな意味がある。スペインの諺の「器用さ巧みさによってうさぎは雌牛を口説く」[16]には、多分に性的なニュアンスがある。この女性性と淫乱さの表象が、検閲で*La Caza*のオリジナルタイトルからうさぎが削除の対象とされる理由となる。

c）民衆としてのうさぎ

食用としてのうさぎは、日本においてはあまり馴染みがないが、ピーターラ

---

[10] “Run with the hare and hunt with hounds”

[11] “Conejos y embustes, igualmente rápido se reproducen”

[12] “Por la boca muere el pece, y la liebre tomanla a diente”

[13] “De donde no se piensa, salta la liebre”. Fernández, M., *Refranero español Antolopología de refranes populares y cultos de la lengua castellana, explicados y razonados,* Madrid, 1987, pp.76-79.

[14] ヘンリー・コスタ『ハーヴェイ』ユニバーサル・ピクチャーズ・ジャパン、2004年。

[15] 篠田知和基『世界動物神話』八坂書房、2008年、240頁。

[16] “El conejo por maña doñea a la vaca”

ビットの、"Your Father had an accident there; he was put in pie by Mrs. McGregor"[17]のシーンは有名であろう。「まずウサギを捕まえよ；まず現物を手に入れよ。料理はそれから（とらぬ狸の皮算用）。」[18]の諺もある。ヨーロッパでは、古代ローマ時代から、ラウリケスという子うさぎが珍味とされ、ホラティウスの『風刺詩』では「大金持ちの宴会に召使たちがさいたウサギの脚をもち、ぞろぞろその場に表れた」とあるようにうさぎ肉が好まれてきた。スペインではパエリャの食材としてもポピュラーで、うさぎに関する諺のほとんどが、食材としてのうさぎと関わる。「とらぬ狸の皮算用」[19]、「うさぎは走りながら、鶉は匂いながら（うさぎは新鮮なまま食べなければならず、鶉は数日熟成させた方がよい）」[20]、「うさぎと鶉は同じパセリを持つ（うさぎも鶉も同じやり方で調理すべし）」[21]など、うさぎの調理法にまつわるものがほとんどである。*La Caza* ではこのように食べられるうさぎが、被支配者として利用され貪られる民衆と重ね合わせられている。

うさぎはその繁殖力が特徴的である。スペインの国名の由来はうさぎの土地又は島（tierra / isla de conejos）であり、うさぎが特に沢山生息している。古代ローマではスペインのうさぎの「多産性は数えきれるものではない」とし、「バレアレス諸島では、彼らは作物を食い荒らすことによって飢饉を引き起こす。[中略] バレアレス諸島の住民たちはこの動物の繁殖を食い止めるために軍隊の援助を故アウグストゥスに請願したというのは、確証のある事実である」[22]と記されている。大航海時代には、生きたウサギが食糧として移されたが、大繁殖で手をやく例もあり、1428年にコロンブスの妻の実家が管理していたマデイラ諸島のポルトサント島が、そのために長期間放棄された。他にセントヘレナ島やフォークランド諸島、ジャマイカ島も「発見」と同時に移入されたうさぎによって後々まで悩まされている。ミゲル・デリーベスは「一組のうさぎが一年で100万匹になる」[23]と述べている。*La Caza* の台詞でも引用されている有名な話に[24]、オーストラリアに1859年にビクトリア州バーウォン公園に放されたイギリス産

---

[17] Potter, B., *The Complete Tales,* Frederick Warne, 2006, p. 9.
[18] "First catch your rabbit"
[19] "Dite el conejo, y quitásteme el pellejo"
[20] "El conejo, corriendo; la perdiz, oliendo"
[21] "El conejo y la perdiz, tienen un mismo perejil"
[22] 中野定雄、中野里美、中野美代訳『プリニウスの博物誌』雄山閣出版、1986年、第8巻、388-389頁。
[23] Delibes, M., *El libro de la caza menor,* Ediciones Destino, 1989, p. 138.
[24] 1996年10月13日の朝日新聞では、オーストラリアの「年間の農畜産物の被害五百億円とあり、野生のうさぎは推定三億匹で、うさぎ10匹が羊一頭分の草を食べる」と報じられている。

の244匹に始まるうさぎの大繁殖がある。政府は1885年にニュー・サウス・ウェールズ州だけでも当時の邦貨換算700万円も支出し、天敵の狐の移入、毒薬や罠で対抗するが失敗する[25]。類似の引用がある『ボニーと砂に消えた男』[26]からもうさぎの繁殖力の凄まじさが伝わる。このような繁殖力から、うさぎは数が多く、しかし力がない無抵抗でありふれた民衆であり、統制できない大衆として表象される。宗教戦争では「プロテスタントのうさぎと友に逃げ、カトリックの猟犬と共に狩をする」としてその数を増やし、抑えきれなくなった新教徒がうさぎに喩えられている。民衆としてのうさぎの表象は、最も顕著であり、またヨーロッパ特有のものであるといえる。

ありふれた存在であることに加えて、うさぎは、母うさぎは子うさぎの面倒をみず、狼のように家族愛が強くないと考えられている。多頭飼いに向かず、仲間意識は脆弱だが、一匹狼のように一匹うさぎとして行動するわけでもなく、そしてその一生の行動範囲も狭く冒険はできない。このようなうさぎはなかなか物語の英雄になれない。猫、犬、狼と比べてうさぎを扱う文学作品は少なく、うさぎを主人公にした物語はネコと比較すると非常に少ない。ロバート・ローソンの『うさぎが丘』でも、民衆としてのうさぎが顕著である。うさぎたちは「ネコのために早死にしたわたしたちの孫のミニイ、アーサー、ウィルフレッド、サラ、コンスタンス、サレプタ、ホガース、クラレンスたちの教訓をおまえは忘れないでおくれよ」とあるように猫である強者によりあっさりと早死にしていく[27]。またうさぎはユダヤ人にも喩えられている「かあさんは、新しい人間が来たら起こるかもしれない危ない事や、嫌な事を全部考え出し、おまけにつぎからつぎへと、とんでもないことを思いついたのです。犬や猫やテンのこと、猟銃やライフルや爆薬のこと、罠や落とし穴のことから、毒とか毒ガスのことまで、考えました。おまけに引っ越してくる人間の中に男の子がいるかもしれない！　かあさんは、最近広まった恐ろしいうわさの話しをしました。そ

[25] 五十嵐謙吉『十二支の動物たち』八坂書房、1998年、87頁。

[26] 著者は、1929年ブルームからグレート・オーストラリア湾にかけての1130マイルにわたるうさぎ、ディンゴ、カンガルーなど害獣よけフェンスの見回りを仕事としていた。捜査のため牧童に雇われようとする警部、通称ボニーを迎えるのはうさぎたちで「まわりじゅういたる所に太ったうさぎの群れが仰天するほどたくさん、まるで小悪魔の大群よろしくうごめいていた」「初夏の夏、車のヘッドライトに照らされた闇に目をこらすと1秒の間に50匹を下らないうさぎが見て取れた」「毒餌車千台くりこんでも、インド洋からバケツで水を一杯汲み上げるようなもんだ」「青草がなくなるとうさぎ40匹は水1ガロンを飲む」アーサー・アップフィールド（越智　道雄訳）『ボニーと砂に消えた男』早川書房、1983年、90頁。

[27] ロバート・ローソン『うさぎが丘』（*Rabbit Hill*）学研、1966年、37頁。

れは親戚のウサギ穴に、ある男が、自動車の排気ホースを繋いだことなのです。この残酷なやり方で、いくつものウサギの家族が全滅したということです」[28]。ローソンの初めての仕事は、1914年の新聞掲載の挿絵で第一次世界大戦のベルギーに侵攻したドイツに対する抗議の詩にそえられた挿絵であり、その反ナチスの姿勢から、排気ガスにより集団で殺害されたうさぎたちは、毒ガスで大勢殺されていくユダヤ人に喩えられていると解釈することができる。

また、リチャード・アダムスの『ウォーターシップ・ダウンのうさぎたち』も民衆としてのうさぎが顕著である。支配層も支配される側も団体で、地道で華のない物語が淡々と続く。生後半年で生殖可能となるうさぎを「うさぎを1匹見たら101匹いると思え」[29]と述べ、その繁殖力からうさぎは「決して滅びない」[30]とする。うさぎは多くの点で人間すなわち民衆に似ているとされ、うさぎは弱いので策略が必要であるとし、運命を受け入れる意志が必要で、黙従が美徳であるとしている。うさぎには千の敵がおり、その中で一番怖いのが白いたちをつれた鉄砲打ちの人間で、うさぎにはそれ以上悪いことは考えられない[31]、と綴られており、まさに*La Caza*の構図そのものと重なる。このようにうさぎは、長い間哀しい無力な民衆として表象されてきた。このような捕食され徹底的に利用されるうさぎ、無力で狡猾で黙従が美徳とされるうさぎの表象は、*La Caza*に結実する。

3．1960年代までのスペインの政治と民衆

*La Caza*を理解するためには、背景にあるスペイン社会とそれぞれの登場人物が表象するところの、大土地所有者、ブルジョア、そしてうさぎによって表現される労働者、農民の置かれている状況を把握しなければならない。ここでは、1960年に向けてのスペイン社会を概観する。

a）振り子の政治

16世紀後半スペインの衰退は明らかとなり、政策への批判は、18世紀にピレネー山脈の向こうで隆盛しているヨーロッパの流れをスペインへ導入しようと

[28] ロバート・ローソン、前掲書、32-33頁。
[29] リチャード・アダムス『ウォーターシップ・ダウンのうさぎたち』(*Watership Down*)評論社、1972年、313頁。
[30] リチャード・アダムス、前掲書、50頁。
[31] リチャード・アダムス、前掲書、256頁。

する啓蒙主義者・自由主義者と伝統主義者となって現れた[32]。19世紀のスペインは、ナポレオンに勝利し、1813年にスペイン独立戦争によりホセ1世を廃し、スペイン王家が戻ってくる。そして自由主義にめざめ、人民の力で国会の開催を始めとして憲法制定にまでこぎつける。しかしフェルナンド7世の帰国によりスペインは厳しいアンシャンレジームに逆戻りしてしまう。クーデターが200件も起き、制定された憲法も数多く、単純計算で一政府の維持期間が一年にも満たないとめまぐるしく、非常に不安定な世紀であった。

1885年に始まる「政権交代制」は、20世紀初頭までの30年間、諸党派の平和的政権交代を目指したもので、大土地所有層・貴族層の利害を反映した保守党と自由主義社会編成を目指すブルジョワ層の精神を反映する自由党の二大政党制として機能した[33]。政権の不人気が政治危機や体制の危機として発現するのを避ける統治形態で、民衆の欲求・不満が何らかの政治的変化が生じること、また軍事蜂起、革命、反乱を避ける装置である[34]。両党は、ほぼ1～3年毎に交互に政権を担当した。1880年代は体制確立期であり、他方で、新しい方向性を得ようとした時期でもある。第一に労働運動の本格的誕生がある。第二にマルクス派の人々によるPSOE（社会労働党）の結成である。第三に、地域主義も顕在化した。第四にまとまりは欠けているが共和主義者たちの存在が挙げられる[35]。党派的となったスペインは“Spain is different”と呼ばれる最終的には暴力を辞さない排他主義[36]をとり、それぞれの非妥協性から最終的には共存への道を見出せなくなり内戦に至る。

左右に振れる政治の政策方針の中心となったのは農地改革である。19世紀末に農業従事者は労働力人口の約三分の二を占め、国民所得の半分以上を創出した。この世紀に農業・土地構造を大きく変えたのは、18世紀末から続く永代所有財産解除（La desamortización）の長いプロセスである。永代借地や共同地として農民が耕作・利用していた土地を国家が収用し、競売にかけたもので、主に国家収入を得る手段、教会への打撃としてこの方策を実行した。貧農・農民への土地分与の手段ではなく、土地を得たのは貴族層、以前からの大土地所有者、商人などの富裕層だった。農民は永代耕作権や共同地の入会権を失い、

[32] ソペーニャ、J.,『スペイン　フランコの40年』講談社、1977年、13頁。
[33] ソペーニャ、J., 前掲書、16頁。
[34] 楠貞義、Tamames, R., 戸門一衛、深澤安博、前掲書、15頁。
[35] 楠貞義、Tamames, R., 戸門一衛、深澤安博、前掲書、16-19頁。
[36] ソペーニャ、J., 前掲書、22頁。

小作農となるか、土地をもたない農業労働者となった。大土地所有者は、最小限の労働力へかかる費用で最大限の利益を得ようとしていたため[37]、農民の所得・生活水準は一般に低く、極めて不安定で貧窮していた。1900年代においてアンダルシアでは農民の半分以上が土地なしの農業労働者で、その多くが各年のほぼ半分は仕事がないという過剰人口状態にあり、カスティーリャ・ビエハでは、貧しき小土地所有農が典型で、ガリシアでは農業で生計を立てられない人々が移民するという状態で、農民の収入は一般に極めて低く、不安定だった。

政府・農民・労働者関連年表[38]

政治	反応
1879年PSOE（社会労働党）結成。労働者階級の政治権力確立。綱領は階級廃絶、私的所有の社会的所有への転化。	
1881年サガスタ政権により労働運動活動が自由に。	
1895年PNV（バスク民族党）結成。王政復古体制による地域特権（fueros）大幅削減への抵抗感、80年代以降のビスカヤの工業化による移住労働者が流入へのバスク保守層の脅威や不安感から民族主義へ。カタルーニャでも支配的ブルジョワ層の利害を反映する地域主義が顕在化。	
1909年7月26日～31日「悲劇の一週間」	PSOEカタルーニャ連合による反モロッコ戦争ゼネラル・ストライキに対し軍が出動、戒厳令。労働者・民衆に約100名、治安勢力側に9名の死者。教会関係建物の焼き討ち。
1921年7月アンワールでアブド・アルカリーム軍によるスペイン軍包囲。スペイン軍に一万人以上の死者、現地住民正規軍部隊（regulares）の脱走、シルベストレの自殺。軍事予算が国家予算の50%を越える。	モロッコ戦争反対の動き。
1922年プリエト政権成立。モロッコ戦争の見直し、信教の完全自由化。労働者の1日8時間労働や退職年金の法制化	教会の反発、経営者の負担増から自由主義政権への反感。
1923年プリモ・デ・リベラ将軍の反乱宣言（pronunciamiento）。軍人統治、選挙制度否定、警察機能強化、国家唯一主義による地域・民族自治否定の政体。労働運動、社会運動の大弾圧。	カタルーニャで地域主義連盟を商工業ブルジョワ層、王政支持派、教会組織、旧保守党の多くが支持。キリスト教民主主義の人民社会党、大土地所有者、カシーケ層が愛国同盟を組織。スローガンは「祖国、王政、カトリック」。

[37] 楠貞義、Tamames, R., 戸門一衛、深澤安博、前掲書、11頁。
[38] ソペーニャ、J., 前掲書、楠貞義、Tamames, R., 戸門一衛、深澤安博、前掲書より作成。

政治	反応
1931年4月総選挙による共和政樹立。共和国憲章においてプリモ体制での不正と専横の調査、信教の自由と個人や団体の自由の尊重、農地改革の声明。市町村領域令と小作人追い立て禁止令。労使同数委員会の設置、農業での8時間労働制と最低賃金制、小作料引き下げ要求権承認、大農場の借地での農業労働者組織の優先権、雇用順番制、強制耕作令の措置。ストライキ権、年間7日の有給休暇、労災基本法、失業対策基金を制定。宗教教育の非強制化、教員の増員と給与の大幅増額、自由教育学院に集った人々を中軸とした農村教育・文化活動組織の創設などの教育改革。	農地改革に対する右派、保守派の猛反対。31年秋に1日8時間労働の実効化を求めて、アンダルシアを中心に土地占拠を含む農場労働者のストライキが頻発。確固とした失業保険制度が確立されず失業者の不満を増大。32年11月にアストゥリアス炭鉱労働者大規模ストライキ。アンダルシア、ムルシア、バレンシアに飛び火した一連の修道院焼き討ち。
1931年6月憲法制定議会選挙。全宗教組織の解散とその財産の国有化という反教会条項が問題に。アサーニャは31年の議会で「スペインはもはやカトリックではなくなった」そして軍の諸装置を「粉砕する」と発言。	王政派と右派共和派の猛反対により条項案撤回。共和主義者や社会主義者が教会や修道院を焼き打ちする暴挙。アサーニャ国防大臣「たとえマドリッドすべての教会の価値を集めたとしてもそれは一共和主義者の命に満たない」と発言し、暴挙を正当化。
1931年10月アサーニャ新首相「改革の二年間」(31年12月～33年夏)。12月9日に承認された憲法：人民(pueblo)主権、23歳以上の男女の普通選挙権、政教分離、地域自治承認、カスティーリャ語を公用語とするが、県や地域の言語の使用権承認、「国の政策の手段としての」戦争の放棄、離婚の権利、無料の初等義務教育、学問の自由。	権力を有する地主、ブルジョア、教会、軍隊の保守勢力の反発や妨害が多岐にわたる。改革は進まず、農民や労働者の反感が広がる。アサーニャ辞任。カトリック勢力が国民行動団を創立。「宗教、家族、秩序、労働、所有」をスローガン。CEDAは、カトリック防衛、農地改革反対、協調組合経済、憲法修正、権威、世俗婚と離婚の不承認、「女は家庭へ」を掲げる。JONS(国民サンジカリスト攻撃団)結成。カトリック両王を表す軛と五本の矢を党章とし、「唯一の偉大で自由なスペイン」「スペインよ立て」がスローガン。
1932年イエズス会の解散、資産没収令、世俗婚、離婚、世俗墓地も法制化。	カトリック形式も認められた為大きな抵抗にはならなかった。
1933年宗教組織の教育活動禁止法。成人のための識字教育、農村文化運動の促進。	宗教組織は初等教育で全体比約20%、中等教育で同30%以上の生徒を教えており、生徒は富裕階級の子供が多く、改革により数十万の生徒が学校を失うとし、公立学校が勧めた男女共学にも抗議。文化教育改革の結果教会が運営する35000クラスが宙に浮き、教師が不足。1932年8月10日サンフルホ将軍のクーデターがセビーリャでの労働者のゼネストにあって失敗。
1933年10月プリモ・デ・リベラの息子ホセ・アントニオがナチスに共鳴し、強権的国家建設に向けた組織を求め、スペイン・ファランヘ党の創立集会を開く。34年にはJONSと合同して、FE(スペイン・ファランヘ党)となる。	33年につくられた中小農民の組織である農業雇用連盟は、賃金引下げ、労働時間延長、機械の自由使用、市町村領域令、雇用順番制廃止、労使混成委員会改組を要求。農場ロックアウト、播種作業の中止、税の不払いで対抗。また鉱山経営者が石炭価格引き上げと解雇の自由を要求。
1933年11月レルー政権が成立。アサーニャの大改革をことごとく頓挫させる「暗い二年間」(33年12月～35年12月)。農地改革法により土地収用はほとんどなくなり、ユンテーロス対象の二年間の時限立法だった耕作強化令も延長されず。サンフルホ反乱参加者の土地没収の中止と没収地の返還、市町村領域令、最低賃金制、雇用順番制の廃止。	CEDAのヒメネス・フェルナンデス農相が、耕作強化令の延長、小作農は12年間以上借地すれば土地購入権を持つなどの措置。農民党、王政派、CEDAが拒否反応を示し、ヒメネス・フェルナンデス更迭。33年に記録されたストライキは32年のほぼ2倍。34年6月全国における農民ストライキが失敗し、死者13人、逮捕者は7000人以上。

政治	反応
1934年「10月闘争」。10月1日CDEAの入閣要求によりサンペール内閣は辞職。4日、新レルー政権成立が発表。5日にPSOEの武装部隊が内務省、警察、電話局、郵便局を攻撃したが失敗。8日に主な指導者が逮捕され騒動が終息。カタルーニャはストライキ状態となり、6日コンパニースはスペイン連邦共和国のカタルーニャ国家を宣言。	カタルーニャ地方師団司令官が戒厳令。軍を出動させ翌7日に「カタルーニャの反乱」は終息。革命委員会がアストゥリアスに地域的権力を確立。28000人の労働者のほとんどが行動に加わる。フランコはモロッコ外人部隊と現地住民正規部隊(regulares)を動員し、10月19日には労働者の抵抗が終わる。10月闘争では、公式発表でも1335人の死者、約30000人の逮捕者。
1935年新農地改革法(農地改革反対法)。いくつかの土地の収用対象からの除外、既に作成された収用対象土地簿の廃棄、旧貴族の土地の無償没収規定の廃止と没収された土地の返還、土地所有者に有利な補償方法、34年の恩赦法によるサンフルホはじめ32年反乱受刑者の釈放。	「暗い二年間」の開始以来、農村での賃金低下、雇用極めて不安定な状況。FNTT(全国農業労働者連盟) 執行部は労働協約と労働法規の遵守、雇用順番制の遵守、機械使用の制限、外国人 (主にポルトガル人)雇用の制限、借地法の実行、失業対策、32年農地改革法の適用で既決の農民の耕作権承認、共同地の回復などを要求して全国ストライキを決定。政府・農場経営者・所有者は農民の要求を認めず、ストライキは失敗。死者13人、逮捕者は7000人以上。
1936年2月16日選挙により19日に人民戦線派政府・アサーニャ政権が成立。恩赦、カタルーニャ政府・議会再開、32年農地改革法による事業再開公布。小作農追い立て禁止、ユンテーロス耕作権承認と適用地拡大、サンフルホ反乱参加者の土地再没収、大土地所有への課税拡大、土地の暫定的収用を公布。失業対策のため週44時間労働の導入、鉄道企業への国家の関与、三ヶ月以上経営者が操業しない鉱山労働者による協同組合形態での経営承認。	収用土地は57万ヘクタール、耕作地を得た農民約11万人。「スペインのすべての経営者に対する白紙委任の死刑判決」であると経営者層の中に不満。労働者にもたらした解放感から参加者100万人を超えるストライキで賃上げと労働時間短縮を要求。軍人社会、教会と伝統的教育界、伝統的農業社会精神、国家統一や帝国復活を唱える精神や経済界に心理的危機が生じ、実際の危機を増幅。
1936年7月17日スペイン領モロッコで軍人による反乱(pronunciamiento)。19日共和主義左翼ヒラール首相の政府が成立。フランコが反乱声明を出す。	スペインを二分する大規模な内戦へ発展。農場所有者の兄弟は共和国支持であっても共和国地域で農民に殺害される。戦闘と爆撃による死者21～30万人、弾圧と処刑11～15万人、栄養不良約25000人。
1936年4月1日フランコが内戦終了を宣言。38年1月国家主席フランコのもとに内閣制政府が発足。「強い国家」「伝統」「帝国復活」を約束。36年8月～9月に農地の旧所有者への返還措置、10月「カトリック国家宣言」。共和国支持者の処刑・弾圧・公務員・教員・法曹界の粛清。言語は「スペインの統一の言語」「帝国の言葉」だけであるとされバスク語、カタルーニャ語が否定。9月25日に政治・労働運動禁止の布告。	内戦での死者13万5000人、戦後の処刑10～20万人、27万人の収監者、収容所と労働部隊に10万人以上。30～40万人が亡命。
1938年～39年ブルゴス内閣。農地改革停止、男女別学、離婚法の廃止、普通選挙の凍結。	
1940年1月労働組合統一法。42年10月労働基本法。	内戦前にできた自由な組合組織を解体。影響力の大きい要求を労働者が出すことが40年代を通じて事実上不可能に。

カトリック教会は、スペイン最大の地主であり、スペインの三分の一をいわれる金融資産所有者だった[39]。常に王制回復体制支持の最有力社会・政治勢力だっ

[39] 斉藤孝『スペイン戦争　ファシズムと人民戦線』中公文庫、22頁。

たため、左派共和派やPSOEの人々にとって制度的に排除されるべきものであった。アサーニャは改革の二年間で、農地改革に着手したが、農民の状況は共和国発足時でも大きく変化していなかった。1930年の370万人の農業人口の圧倒的部分は農業労働者約190万人、小作農・分益小作農約75万人、中小土地所有者約100万人であり、他が富裕土地所有者6～7万人とみなされうる。大土地所有者はこのうち1万人当たらずであるが、この大土地所有者層が全有用地のほぼ50%を占めている。農業・農場規模の点でも大農場(250ha以上のラティフンディオ)は、全有用地の三分の一以上を占めていた。これは南部で顕著であった[40]。スペインの農業は寄生地主的大土地所有の圧倒的な支配によって性格づけられ、人口の4%が土地面積を所有するのに対して、人口の65%は土地の6%を持つにすぎない。広大な土地はわずかな地主に握られていたのである[41]。

31年の農地改革法草案は、高生産性の農場を除いてラティフンディオを国家が収用するとした。その土地を土地なし・土地不足農民が耕作し、農民は所有権を持たず定額の借地料を払う。そして大土地所有への累進課税で改革遂行費用を捻出するものである。しかし草案はどの勢力からも支持されず、右派共和派や農民党は、所有者の直接経営になる土地は収用対象から除き、旧貴族名義の土地の優先収用をやめ、所有者に有利な補償、収用地の私有化などを主張したが退けられ、31年9月に農地改革法が成立する。その中では大土地所有への課税は消えた。法は成立したものの、政府にはこれを遂行する意向も実力もなかった。

31年末には大土地所有層を含めた大資産家の連合体スペイン経済同盟は強力な反対運動を展開した。共和党を失墜させるため虚偽の報告をし、共和国政府は、32年春に小麦輸入を許可した。実際夏になると大豊作だったうえに、ほぼ輸入量に匹敵する分の備蓄小麦が出回った。小麦価格は2割ほど下落し、200万近い小麦農民を破滅させる措置だったとして攻撃された。農地改革の成果は、収用土地17万ha、耕作地を得た4万5千人であるが、この大半は改革法以外の措置(耕作強化令による2年間の土地耕作権、サンフルホ反乱参加者の土地没収)で、共和政最大の課題である農地改革は実現しなかった。共和主義勢力は改革派と守旧派に明確に分かれた[42]。アサーニャは農地改革に失敗し辞任する。

政治のもう一つの柱はモロッコ戦争である。1898年12月の米西パリ条約によっ

[40] 楠貞義、Tamames, R., 戸門一衛、深澤安博、前掲書、73頁。
[41] 斉藤孝、前掲書、23-24頁。
[42] 楠貞義、Tamames, R., 戸門一衛、深澤安博、前掲書、75頁。

て、スペインが植民地のほとんどを失うことが確定された。米西戦争の敗北は、体制を危機に陥れたわけではなかったが[43]、スペイン国家の国際的地位の完全な崩壊と弱体化と後進を示すものであった。スペインに代わってアメリカが有力帝国主義国家群に仲間入りするという象徴的過程で失った名誉の回復を謳い、軍部にアフリカニスタが形成される[44]。しかしモロッコ戦争の開始はスペイン国内では不人気で、「悲劇の一週間」[45]と呼ばれる流血の惨事に至った。PSOEはモロッコ戦争と帝国主義・植民地問題についての理解が弱く、カタルーニャからモロッコ反対戦争の動きが表れた。そのためマウラ政権も後続のマウラ派首相の政権も長続きせず、1922年にガルシア・プリエト政権が成立した。しかし信教の自由化による教会の反発と経営者側の負担増を強いる政策から、カタルーニャ地方隊の司令官だったプリモ・デ・リベラ将軍が反乱宣言(pronunciamiento)を起こす。

プリモはモロッコ戦争に反対する「戦争放棄派」に属していたが、戦争続行を決定し、モロッコに勝利した。しかし、支持を得ていたカタルーニャにも弾圧を加え、ブルジョア層も敵に回し、さらには軍部からもクーデターの動きが出るなど次第に追いつめられていく。また、24年のカタルーニャ語での説教禁止は、多くのカタルーニャ人に体制忌避の隠然たる感情を生じさせた[46]。プリモは植民地戦争勝利の目的は達したものの、大衆の支持を体制から切り離してしまう。加えて1929年の世界大恐慌がおこり、政府は重大な財政危機に陥る。財政通貨状況の悪化、軍指導部からの支持の否定により1930年1月30日に辞任した。

1930年代の経済不振と不安定な社会から抜け出すには、ファシズムの強権に頼るのが得策と考える人々、マルクス主義が良い世界に導いてくれると考える人々、そしてアナーキストとスペインは分裂し、烈しい論争を繰り広げるようになる。1931年4月の総選挙で共和政樹立が宣言され(第二共和政時代1931年—1936年)[47]、10月にアサーニャが新首相となった。

共和派の諸改革反対する諸勢力は、31年から32年にかけて政治勢力として結

---

[43] ソペーニャ、J.,「現代スペイン思想の流れ (1989-1936年)」『上智大学外国語学部紀要』5、53-93頁、58頁。

[44] 深澤安博「20世紀初頭のスペインのアフリカニスモ—1898年の「破局」から帝国の復活へ—(上)」『人文科学論集』37、21-49頁。

[45] カミロ・ホセ・セラ『パスクアル・ドゥアルテの家族』講談社、1989年。

[46] 楠貞義、Tamames, R., 戸門一衛、深澤安博、前掲書、52-53頁。

[47] 楠貞義、Tamames, R., 戸門一衛、深澤安博、前掲書、62-63頁。

集しつつあった。まずカトリック勢力は国民行動団を創立し、CEDA（スペイン右派自治連合）は、カトリック防衛、農地改革反対を掲げた。サンジカリズムのグループは31年に合同してJONS（スペイン伝統主義ファランヘ党と国民サンジカリスト青年行動隊）となった。プリモ・デ・リベラの息子ホセ・アントニオはナチスに共鳴し、34年にはJONSと合同して、FE（スペイン・ファランヘ党）となった。

33年11月のレルー政権の成立により共和政二番目の政治的振り子「改革と後進の二年間」（33年12月～35年12月）を見ることになる。レルー政権においては、予期された通りアサーニャによる改革の後退・撤回が見られた。CEDAの中でJAP（国民連合＝AP青年部）やヒル・ロブレスは次第に行動主義右翼の姿勢を示し、34年4月JAPはエル・エスコリアル修道院の前で大集会を催しヒル・ロブレスはフェリペ2世にあやかった。また9月のCEDAの集会は、レコンキスタでキリスト教軍が象徴的な勝利を収めたコバドンガで催されるなど、強力な国家や帝国の復活に訴えかけた。金融的・大土地所有層や貴族層の農業的寡頭制、教会、軍人社会に表れた伝統的精神が顕著となった[48]。

共和政は植民地のことをほとんど考慮しなかったので、英仏政府はジブラルタルやモロッコ植民地の現状維持に安堵した。しかし、ファシスト体制のイタリアは、プリモ体制や王制を崩壊させた共和制を警戒した。TYRE（伝統主義者とスペイン刷新派）のカルリスタは、イタリア・ファシスト政権と関係を強め、ムッソリーニの階段でイタリア政府の武器・資金援助が約された。PSOEのプリエト派もカバリェーロ派もCEDAに疑似ファシズムを見て、CEDAが政権に加われば革命行動をとることで一致した。1930年代は世界的な不況と失業の時代であり1939年からの世界大戦の予兆にヨーロッパやアメリカが脅えていた時代である。その対立も、単なる国家間の対立ではなく、ファシズムと人民戦線という対抗の図式が示すように、社会を分断する政治的・イデオロギー的対立を内包する対立だった。しかし共和派の再編も起き、改革の二年間の復活を求める共和派が崩壊しなかったことは、民族自治承認、政教分離、教育改革、軍隊改革など改革への支持と共感が続いていたことを示す。

レルー政権での最大の焦点も農業・農民をめぐるもので、農地改革反対法とも呼ばれる措置をとった。農地改革の反動は、当然労働者と農民の不満を助長

[48] 楠貞義、Tamames, R., 戸門一衛、深澤安博、前掲書、33頁。

し、「十月闘争」となる[49]。PSOEによる革命的行動は失敗に終わり、JAP（AP青年部）は、「マルクス主義をやっつけるか、マルクス主義がスペインを滅ぼすか、どちらかだ」と叫んだ。旧スペイン刷新派を中心に国民ブロックが組織され、強権的国家実現を目指した。FEのホセ・アントニオも「我々の任務は内戦まで進む事である」と呼号した。しかし「改革の二年間」の成果をひっくり返し、強権的国家を実現できる状況には至らなかった。

1936年2月16日選挙により、19日に人民戦線派政府・アサーニャ政権が成立し、農地改革法による事業再開公布した。人民戦線は軍と教会と大土地所有から抜け出さない限りスペインの繁栄はないという姿勢をとった。スペイン軍の保守勢力やカトリック教会、産業界、貴族たちがそれに反抗する図式で、1936年7月17日についにスペイン領モロッコで軍人による反乱(pronunciamiento)が起き、内戦が始まる。ドイツとイタリアはフランコの要請に応え、人民戦線政府に対するフランコによる反乱軍を支援し、1936年7月から8月初旬にジブラルタル海峡に「空の橋」を架け、人民戦線政府側の艦船を沈めた。ここにドイツのスペイン内戦への関与が始まる。1936年8月15日にはフランコ軍によるバダホス虐殺事件が起き、バダホスの闘牛場に集められた共和派民兵が銃殺され、モロッコ兵によって1500名以上が殺害された。大聖堂の祭壇階段上での民兵の戦死は、全面戦争を恐れてのフランス軍のスペイン派兵反対派に衝撃を与えた。フランソワ・モーリアックは聖母被昇天祭に行われた虐殺ゆえに「汚された勝利」と批判し、共犯と化してきた不干渉について、フランス人の介入を訴えた[50]。しかしフランスはイギリス圧力のもと不干渉体制をとる。

b）スペイン内戦とゲルニカ

バスクの小邑ドゥランゴ[51]とゲルニカの爆撃はスペイン内戦の中でも最も悲劇的な事件の一つである。フランコと親しいドイツ諜報局長ヴィルヘルム・カナリス元帥が、反乱軍に軍事援助を与えればスペインがファシズムの牙城として頼りになるとヒトラーとその側近たちを説得し、ナチスは輸送機20機、戦闘機6機を送ると約し、ムッソリーニは重爆機12機の派遣を通知した。反乱軍はいま一つ勢いを欠いていたが、スペイン領モロッコ、カナリア諸島、バレアレス諸島、本土北部の大半、南部のセビーリャ、コルドバ、グラナダの制圧に成功

[49] 楠貞義、Tamames, R., 戸門一衛、深澤安博、前掲書、90-91頁。
[50] 渡辺和行『フランス人とスペイン内戦』ミネルヴァ書房、2003年、298-302頁。
[51] 1937年3月31日の爆撃で日曜ミサに参列していた聖職者と教区民百数十名が犠牲となった。

した。しかしマドリッド攻防戦に失敗した。

ナチスのフーゴー・フォン・シュペール将軍は失敗の原因が、持続的な空襲に合わせての陸軍の攻勢をフランコが学んでいないためであると報告した。近代戦は空軍抜きには戦えないとし、迅速な再軍備に拍車をかけるべく、反乱軍の支配地域からただちに大量の鉄、銅などの原材料を輸出し、重要な鉱物資源の豊富なバスク地方[52]と港湾都市ビルバオをできるだけ早く陥落させることで合意した[53]。スペインは世界産出額の36%占める水銀、28%を占める黄鉄鋼、それに鉄鉱石など重要な鉱物資源を産していた。1936年にスペインは263万トンの鉄鉱石を産し、ドイツの75万トンと比べればその重要性がわかる[54]。

1937年にはサンディカリスト[55]、ファランヘ党員、反フランコ派、愛国主義者、共和国支持派、ファシストなど多くの主義がみられたが、思想信条を異にしても、正義を確立するには誰もが破壊と死を賛美し、また多くのならず者たちの屍を乗り越えない限り、スペインが健全な国家にはなれないという考えが共有されるようになった[56]。フランコはアメリカのジャーナリスト、ジェイ・アレンに「どんな犠牲を払っても、スペインをマルクス主義から救う」つもりだと断言し、「そうなると、国民の半分を撃ち殺さなければなりませんね」と訊ねるのに「もう一度くりかえす、どんな犠牲を払ってもだ」と応えており[57]、住民の犠牲が肯定されている。ファシスト軍の最前線とバスク地方の産業の中心ビルバオの間に最後に残った戦略上の要衝を破壊すれば、象徴的な意味合いが生じる。ビルバオ攻略は容易ではなく、たとえ成功するにしても多大な犠牲が予想された。初日の空襲の犠牲者は120名を越え、その後も連日ほぼ同数の死者が出る。ゲルニカの犠牲者を含む兵士、市民の犠牲者は不明ではあるが、60万人ともいわれている。

---

[52] 1880年代以降、ベッセマー製鋼法導入によって黄鉄鉱石の需要が急増し、これを多く産出するビスカヤとその周辺の鉄鉱石採掘量が急激に拡大した。90年代にイギリスに70%、ドイツに約16%と、90%以上外国に輸出された。鉄鉱石採掘業は大部分、外国資本のもとになったが、一部はスペイン資本であり、それによりビルバオ製鉄鋼業の発展の基礎が据えられた。そこから派生して、ビルバオは金属、造船、化学産業地域ともなった。楠貞義、Tamames, R., 戸門一衛、深澤安博、前掲書、12頁。

[53] ラッセル・マーティン（木下哲夫訳）『ピカソの戦争　《ゲルニカ》の真実』白水社、2003年、22-23頁。

[54] 斉藤孝、前掲書、99頁。

[55] ゼネストなどの直接行動で議会制民主主義を廃し、政治の実権を労働組合の手中に収めようとする運動の参加者。

[56] ラッセル・マーティン、前掲書、31頁。

[57] 斉藤孝、前掲書、11頁。ラッセル・マーティン、前掲書、37頁。

リヒトフォーフェン中佐は3段階からなる計画を実行した。ロンドンのタイムズ紙のジョージ・L・スティアの記事によると、攻撃は3時間15分続き、爆発力の強い500キロ級を最大とする爆弾による第一波の攻撃によって、市街中心部の建物はほぼ完璧に破壊された。第二に、周辺の野原に避難した逃げ惑う市民めがけて低空からの機銃掃射をした。最後の数百発のアルミ製1キロ弱の焼夷弾の瓦礫の上に投下され、ゲルニカの全ては跡形もなく消し去られた[58]。

ピカソの「ゲルニカ」は、反ファシズムの意思表示として有名な作品である。ゲルニカは、1937年のパリ万博のスペイン館の入り口ホールに描かれた壁画である。パリ万博では、世界の産業と科学の最新の成果を披瀝するため[59]開催され、花形は航空館で、リズミカルな色彩と大胆な構成によって自由に空間をゆきかう未来、飛行機の時代への大衆の夢がかきたてられていた。それに対し、ピカソの「ゲルニカ」は、カラフルな科学技術との対比で白、黒、さまざまな色合いのグレーを基調とし、やがて世界に死と悲惨をもたらす使者としての飛行機が透視される。この対比は飛行機をシンボルとしてテクノロジーの発達が現代生活にとってもつ二面的な意義を浮かび上がらせている。ゴヤの「1808年5月3日の銃殺」にも顔のないテクノロジー軍団に個人として立ち向かう人々[60]という構図を見ることが出来る。

ゲルニカの爆撃など象徴的な攻撃を経て、バスク地域は反乱派が支配し、反乱派が軍事的展開のイニシアティブをとる画期となる。4月1日フランコは内戦の修了を宣言し、10月1日フランコが国家主席とされる。これにより、大土地所有者、産業ブルジョアジーが権力の維持に関わり、*La Caza*の中で無力なうさぎたる小作人や労働者を貪る社会システムへと移行していくのである。

c）内戦後の社会

フランコは、第二次世界大戦が始まると、中立宣言そして非交戦国宣言をする。ヒットラーとの会見によりスペインは参戦を要請されるが、内戦のためゆとりが全くないとしてフランコは拒絶し、再び非交戦国から中立へと態度を変更し、アウタルキーを採る。1945年8月2日広島市への原爆投下の4日前に、ポツダム会談で反スペイン声明が出される。8月15日に日本の無条件降伏で第二次世界大戦が終結し、10月に国際連合発足するが、翌1946年にスペインの加盟

[58] Steer, G., *Times,* 1937, April 27.
[59] 宮下誠『ゲルニカ　ピカソが描いた不安と予感』光文社、2008年、20頁。
[60] 荒井信一『ゲルニカ物語―ピカソと現代史』岩波書店、1991年。

申請が拒否される。同年3月には、英・仏・米三国政府がフランコ政権を非難する共同声明を発表され、12月にスペイン排斥決議採択される。各国に対しては、駐スペイン大使の本国召還を勧告され、ドイツ・イタリア・ファシズム、日本が戦争に敗れた後も唯一生き残った全体主義国家として、スペインは国際社会から締め出され、孤立を余儀なくされる。また、国内の基幹施設の破損は著しく、経済も壊滅状態、鉄道の車両の半分近く、そして商船の3隻に1隻は撃沈された。家畜と穀物の損失により、大多数のスペイン人が長期にわたる飢餓と苦難の停滞期（1939年～51年）を経験することになる。

第二共和政は、農地改革という長年懸案の理念を法制化しようとして、大土地所有者の利益を根底から脅かした。旧くからの貴族の大部分は、恐怖心に駆られたり資産取崩しを余儀なくされたりして、所有地を金融資本・産業資本・自由業者（医者・弁護士・公証人など）に売却した。フランコ時代のスペインの農業経営は人民戦線政府が断行しようとした農地改革が内戦により頓挫し、内戦前と大して変わらない構造となる。また旧大土地所有層が首尾よく産業資本家に転身するなど、このように大土地所有階層と金融・産業界が大幅に重なり合い、利害が一致する重層構造が出来上がった[61]。

工業労働者は、1939年には200万人ほどだったが、その後増え続けて約400万人に達した。内戦後工業労働者は垂直的労働組合の枠内に完全に囲い込まれ、1940年代の法整備により、組合組織は解体され、影響力の大きい要求を労働者が出すのを事実上不可能にした[62]。

1960年代から、スペインは奇跡の高度成長が生じ、経済面でも改善が可能となった。1940年代後半の冷戦による新たな国際対立による新秩序は、スペインを1950年11月の国連総会排斥決議の解除、1955年12月の国連加盟の承認へと導く。1950年のアメリカ輸出入銀行の長期借款の供与の決定、1953年のアメリカとの相互援助協定、欧州諸国からの信用の供与により、基礎的な諸工業もめざましく成長した。1957年には農業ブルジョアジーが政治的力を失い、産業ブルジョアジーが台頭し、権力掌握が始まる[63]。これが *La Caza* の制作された時代である。

---

[61] 楠貞義、Tamames, R., 戸門一衛、深澤安博、前掲書、144頁。
[62] 楠貞義、Tamames, R., 戸門一衛、深澤安博、前掲書、149頁。
[63] ソペーニャ、J., 前掲書、153頁。

4．*La Caza*におけるうさぎ

*La Caza*サウラの三番目の長編映画で、NCE（Nuevo Cine Español）の最高かつ最も重要な作品の一つであり、46年後の現在もその評価は代わっていない。*La Caza*の手法は、スペインのそれまでの映画と一線を画し、メタファーを用いた現実の漸近線を描くもので、Nouvelle Vagueの深奥が表現されていると評価されている。また、シネ・ノワール、ウェスタン、特にペキンパー・タッチとの共通性が見られる。サウラの初期の作品に共通する、リアリズムのコンセプトで、窒息しそうな時間の経過の中、現在と追憶が個人そして社会との間を交錯する。過去はFlash-backを用いずに、常に人々の現在に干渉する。トラウマと緊張を寓意により要約した傑作であるが、表象の難解さからシネ・クラブ向きであるとされている[64]。

通常スペインでは映画監督になるには見習いから下積みを積むか、組合からのバックアップ、もしくは短編映画の制作を始めるか映画学校で学ぶかである。サウラの場合は、IIEC（Instituto de Investigación y Experiencias Cinematográficas）で1952年から53年学び、同校で1957年―58年に教鞭をとり、ドラマではなくドキュメンタリーに傾倒した。この時期のドキュメンタリー制作者としての活動が*La Caza*につながる[65]。EOC（Escuela Oficial de Cinematográficas）でも1962-65年まで教え、その後は映画監督業に専念する。サウラは3本目の長編映画で、内戦の記憶を扱う低予算の映画である*La Caza*の制作を企画したものの、1年かけて制作会社をまわり、台本を見せた6社に断られている。

スペイン内戦を扱うデリケートな内容である*La Caza*に対する検閲の対応は、意外にもサウラに有利なものだった。フランコ体制は、「解放的な独裁制」（una dictadura liberal（1962-1969年））といわれる近代化[66]の過程にあった。1959年に経済援助と引き換えに米軍基地の設立を認めるなど、国際的な援助を希求する段階にあり、民主的なイメージを対外的にアピールするため、文化面、特に映画に配慮され、情報観光大臣フラガと映画演劇総局長エスクデーロの下、以

---

[64] Hidalgo, M., ""Yo no tengo ningún respeto por los guiones", dijo Saura", *La Caza de Carlos Saura...42años después,* Valencia, 2008, pp.143-163, p. 153.

[65] Monteverde, J.E., "La modernidad telúrica de *La Caza", La Caza de Carlos Saura...42años después,* Valencia, 2008, p. 35.

[66] Fernández Vilches, G., "*La Caza* en Estados Unidos; itinerarios de exhibición y respuesta crítica", *La Caza de Carlos Saura...42años después,* Valencia, 2008, p. 80.

前と比べてかなりの自由が認められた。1965年12月13日の検閲では、「攻撃性と悪意があるが、禁止する理由は見つからず、多くの人々に映画の持つ悪しき考えは理解されないものと思われる」[67]と公開が認められた。またサウラの方も、60年代における問題を避け、商業的な阻害を避けようとした[68]。フランコ期の検閲では、性的描写と残酷さに注意が払われ、特にフランコ体制が「平和と就業の25周年」(XXV años de paz y de trabajo)を祝ったばかりの時期において、内戦を彷彿させる描写が避けられた。検閲は以下のような訂正を指示した。まずオリジナルのタイトルである *La Caza de conejo*（うさぎ狩り）を「「うさぎ狩り」よりも「狩り」の方がよりよいタイトルであることは疑いない」[69]とconejoを削除した。理由はconejoが俗語で膣を意味するため、セクシュアルな響きがあるからである。またビキニ姿や半裸の女性のグラビア雑誌とうさぎの死体のショットに配慮すること、「胸糞が悪い」[70]と「小便してこい」[71]、「フェレットというのは、ある種の人間を指すのだ」[72]「そいつらはうさぎみたいなものだ」[73]、「毎日スペインで12000000ペセタをカエルどもが消費する」[74]、「俺にキリストみたいな面をはりつけた」[75]といった台詞を削除することが指示された。また、うさぎを殺すシーンがゆきすぎにならないように注意すること、バーの名前「スペイン（España)」を変更すること、聖職者を全てのシーンで扱わないこと、骸骨を兵士とせず、内戦への言及を排除することなどが指示された。検閲期の映画は「みつばちのささやき」のようにセリフが少ない映画が目立つが *La Caza* も同様である。*La Caza* が気に入ったブニュエルが台本を読んだ際「なんて対話が少ないんだ。しかも普通の対話だ！」[76]と驚き、サウラ自身も「台本には何もなかった」と述懐している[77]。

サウラは *La Caza* がスペイン国内では限られた知識層もしくは大都市でしか理解されないだろうと考え、国際映画祭での成功を期待する。実際スペイン国

---

[67] Fernández Vilches, G., op.cit., p. 81.

[68] Gómez Vaquero, L., "*La Caza* como emblema del nuevo cine español: La recepción crítica de la película en España", *La Caza de Carlos Saura...42años después,* Valencia, 2008, p. 57.

[69] Hidalgo, M., op.cit., p. 150.

[70] "puñetera"

[71] "ponlo a mear"

[72] "en eso los hurones son como algunos hombres".

[73] " esos son como los conejos"

[74] "doce millones de pesetas consumen cada día las ratas en España"

[75] "me han puesto la cara como un Cristo"

[76] "¡Qué pocos diálogos! ¡Y además son diálogos normales". Hidalgo, M., op.cit., p. 155.

[77] "en el guión no había nada". Hidalgo, M., op.cit., p. 156.

内での1965年-67年の間で収益は536位であった。しかし国外では成功し、ベルリン映画祭、ロンドン、アカプルコ、ニューヨークの映画祭で評価され、サウラの国際的名声は*La Caza*によって確立した。愛国的な雑誌1966年6月29日の*Arriba*では「全面的にスペイン的な映画が勝利した」[78]と*La Caza*のベルリン映画祭銀熊賞受賞の快挙を喜び、映画の内容は気にも留めなかった。受賞後のインタビューでサウラはスペイン映画が低開発である[79]と発言している。

批評は*La Caza*の表象に集中した。1966年9月23日の*New York Times*では「難解で複雑で退屈」、1967年4月25日の*New York Times*では「うさぎ狩りは内戦であり、内戦への怒りのアレゴリーであると理解される。主要の三人はファランヘ党員で、洞窟や山で共和派の兵士を撃った」とする解釈が共通したものだった。そのため当時の解釈は、総じて60年代の表象という映画との同時代性の視点からの理解が欠けたものであった。サウラは内戦との連関を曖昧にし、「自分は気晴らしの為の狩猟は反対である。多くの狩人を知っているが、皆陽気で外交的である。スポーツとしてやっている分には何も問題はない。一匹の動物も見えないことはしばしばで、白いものが動くのが見えるだけだ。しかしヘミングウェーは最良の狩のターゲットは人間だと言っていなかっただろうか？似たようなことは戦争で起きる。全てが意識の外に追い出された時、敵はなにか動いている白いもの以上のものではなくなる」[80]と述べ、自身の映画の表象について、スペイン内戦ではなく、全ての戦争とパラレルであり、普遍的で平和文学としての解釈を示唆している[81]。

a）舞台

*La Caza*のストーリーは簡潔である。夏の暑いとある日曜日、50代の男たちが荒廃したカスティーリャの私有地にうさぎ狩りにやってくる。特に時代設定はないが、66年制作時と同時代であると考えられる。撮影はトレドのセセーニャ（Seseña）という農地とエスキビオス（Esquivios）という村で行われた。潅木しかなく石ころだらけで住むのに適さず、人を寄せ付けない不毛な土地はスペインの貧困を表す。また土地を荒廃させているのは、草を食い尽くすうさぎたちである。冒頭の危篤の老女は「動物たちにミルクを持ってきたか？動物た

[78] Monteverde, J.E., op.cit., p. 67.
[79] Monteverde, J.E., op.cit., p. 69.
[80] *New York Times,* n. 26, 1967.
[81] Fernández Vilches, G., op.cit., p. 99.

ちは空腹で気が狂ったようになっているから、ミルクを持って来なければならないよ。何匹かは逃げ出してしまうだろうよ」[82]と言う。病で死に瀕しているうさぎ、狭い籠に閉じ込められて空腹に暴れるフェレットは、60年代に農地から離れていくものが多い中、狭い土地に縛り付けられ飢えている小作人そのものである。

他方、フランコ期は狩猟文化が盛んで、権力者との繋がりが深い。1940年代から50年代にかけて財を成した者はほぼ例外なく、その一部を土地購入に投下した。その結果スペインでは、田舎に農場を所有する大物企業家が多数いた。その背景には、la Caza（狩猟）や魚釣りがフランコ自身の趣味であった点が影響したかどうかは別にして、会社の重要事項が狩場で決めるといった、フランコ体制とともに登場した一種独特の田園回帰ブームがあり、それはそのまま *La Caza* の地主、産業ブルジョアなど権力者の集う舞台となっている。

b）登場人物

四名の主要登場人物ホセ、パコ、ルイス、エンリケは、定義づけることはできず、関係性も明らかでないとされる。それぞれは、人格化されていない人物（no-personaje）で、心理状態や性格は不透明であり社会的地位を名詞で明らかにされることはない[83]。また主要登場人物が共有する過去の秘密について説明されることはない。ホセとパコとルイスは昔からの知り合いで、様々な秘密を分かち合う。四人目のアルトゥーロの自殺も秘密の一つであるが、説明はない。しかし登場人物はステレオタイプ的である。

ホセは、農地の所有者で、管理人フアンを見下す支配者層である。パコと共にフランコ側で戦った勝者（vencedor）であるが、60年代の経済発展に取り残され、「金で全てが変わった」と嘆く衰退した地主層を表している。ホセはパコに「戦場で助けてやった」と過去を持ち出しながら経済的な援助を求めるために狩猟の一日を企画する。これは60年代のマーシャル・プランを始めとした外国の援助を模索する、他力本願のスペインの姿勢をも表す。そして産業ブルジョアのパコに「数日のうちに真面目に君の就職について話をしよう」[84]と言われ激高するところから、地代収入で生きる事を誇りとする伝統的なイダルギスモを

[82] ¿Has traído la leche para los animalitos? Se pasan el dia durmiendo y removiendo sin parar. Tiene que traerme la leche para los bichos. Están como locos y alguno se va a escapar...".

[83] Monteverde, J.E., op.cit., p. 43.

[84] "Si quieres trabajo te lo puedo proporcionar". "dentro de unos días hablaremos en serio de tu trabajo".

代表しているともいえる。元々の家産があるので、パコのように自力で上昇せず、アナという年老いた妻、すなわち見たくない過去を棄て、若いマリベルという若い愛人を得るが「(没落している、旧い世代の) ホセの相手ではない」と一蹴される。また離婚のため経済破綻している返済滞納者でもある。ルイスに対して怒っており、暴力的である。銃弾を受けた時から腹部が痛み[85]薬を飲み続けているシーンは、内戦の癒えない傷の苦しみを表している。

パコは60年代の産業ブルジョアの代表例であり、ホセによって表される農業の衰退に対する産業の拡大という対比的な存在である。スペインは、1953年のアメリカとの相互援助協定、欧州諸国からの信用の供与によりイギリス・フランス・ベルギーからのプラント輸入が可能になった。これによりエネルギーや基礎原材料(セメント、鉄鋼。非鉄金属)不足によるボトルネックが解消され、工業生産の伸び率がプリモ・デ・リベラ独裁時代の2倍以上となり、基礎的な諸工業もめざましく成長した。1957年には農業ブルジョアジーが政治的な力を失い、産業ブルジョアジーが台頭し、権力掌握が始まる[86]。大土地所有者と産業資本家は、元々内戦時同じ党派で戦っていたが、産業化についていけなかった地主は没落し、産業資本家に助けを求め、そして *La Caza* の中で対立を深めてゆく。パコは「金のためなら何でもする」[87]冷淡で良心のない企業家で、それ故に低い素性からの成り上がることができた。トラック運転手[88]すなわち闇取引をした暗い過去を持ち、内戦への協力によって経済的に高い地位を得るが、その取引によりアルトゥーロは自殺している。出世主義者で、金持ちの女と財産目当てで結婚をする、古典的な貧乏な男である。老いを感じ、おそらく性的欲求不満もしくは性的不能者である。40年代前半の「ぜいたくさ」の代名詞は、アメリカのタバコ、フィリップス・モリスだった[89]が、*La Caza* に見られる支配層は、ウィスキーやジン、コカコーラを水で薄めて飲み、アメリカからの輸入品をステイタスとして享受している様子が垣間見られる。

ルイスは、青の旅団に入り、エンリケの「なんて射撃の腕前だ!どこで習ったんだ!」[90]の台詞と、武器に詳しくライフルの一種を用いていることから内戦で狙撃兵だったことがわかる。妻に棄てられSFを読んで気晴らしをしている。

---

[85] "tengo el dolor de estomago desde que me dieron un tiro".

[86] ソペーニャ、J., 前掲書、153頁。

[87] "hubiera hecho cualquier cosa por dinero"

[88] "fuiste camienoro?" "de eso hace mucho tiempo".

[89] ソペーニャ、J., 前掲書、91頁。

[90] "¡Vaya que puntería! ¿Dónde has aprendido tirar así?

仕事もなく、アル中で、ホセに取り入って寄食し、弱い立場から従順でおとなしく、しかし、従属と抵抗の複雑な関係にある。そのためこの時期の民衆を表すといえる。また、ホセとルイスは金と仕事の二項式で、奇跡の経済成長という公的発表の裏にある問題を表し、内戦の勝者の戦後の自滅を表す。ルイスはホセとパコをつなげ、エンリケを導く役回りである。

エンリケは、一日の唯一の生存者で、旧い世代のトラウマの観察者である。パコの義弟で、エンリケ以外の登場人物は全員老いを感じている中、21歳と圧倒的に若く、新しい世代の代表例である。世代間の乖離は、“Snob ye-ye”, “Te veré”, “Española, abanícame”, “Tu loca joventud” といった音楽で線引きされる。エンリケは内戦に関わりのない世代の罪のない無邪気さを表す。狩りは成熟した男性となる通過儀礼を表す。同じ世代のカルメンもツイストを躍り、男性性器を表象する銃など性への好奇心を示す。ラストシーンの悲劇により、内戦の恐怖を知ることにより知恵をつけ、新しい時代の希望として生き残る。

フアンは片足が不自由で虐げられた従順な農民で、高価で大事なフェレットを殺されても抗議する術を知らない。フアンが表象する農業賃金労働者は1939年からその数を減らし始めた。もともと生産性の低い農業を基盤にした農民層は生活難に陥り *Surcos*（根無し草）[91]のように、工業地帯へ移動していった。フアンの「ご存知のように兄はドイツに行ってしまって」「メルセデスはイタリアに去ってしまった」[92]に表れるように、国内の農村から工業地帯や大都市、さらにドイツやフランスなど外国にむけて大量の人口が流出し、1961年に最高の11万2000人に達する。これによりユンテーロスやプロレタリアは壊滅状態に陥った[93]。フランコに抵抗して要求を突きつけるはずの人材は失われ、1930年に労働者のうち農業45.5%、工業26.5%、サービス28.0%だったのが、1965年には34%、35%、31%と農業人口は11.5%減少し、工業労働者は8.5%、サービス業は3%増加し、サービス化を伴った工業社会への変化を示している[94]。また農業労働者のうち未熟練ないし半熟練労働者が88.6%で、先進諸国では異例の臨時雇いを続けこれはスペイン農業の低開発状態を証左している。1962年の農業センサスによると旧来の大土地所有（ラティフンディオ）・零細土地所有（ミニフンディオ）の二極分化が依然として存続し、72年段階で200ヘクタールを超える大土地所有は農場のわずか1.2%であるにもかか

[91] Nieves Conde, *Surcos*, 1951. 農村を棄てた農民たちがマドリッドの下層民となり失業、貧困、犯罪へと堕ちていく生活を描いた。

[92] “Ya sabes, mi hermano se marchó a Alemania”, “Mercedes se marchó a Italia”.

[93] 楠貞義、Tamames, R., 戸門一衛、深澤安博、前掲書、145頁。

[94] 楠貞義、Tamames, R., 戸門一衛、深澤安博、前掲書、163頁。

わらず、総面積は48%に達している。地主層の最小限のコストで利益を引き出そうとする非妥協性と、農民のウェートの低下を示す奥深い変化は、過疎化した農村の農地におけるありふれた光景である。フアンは病気の母親をサナトリウムに入れるために給料の前借もしくは借地料の割引を頼むが、小作強化令も小作料引き下げも撤廃され、なにも叶えられない。また右派の勝利により、農地改革が停止し、いかなる主張もできなくなり、「狩猟の変わりに上の少しの土地を耕させてくれれば、いい土地で収穫があるのだが、彼にとってはどうでもいいのだ」[95]と嘆く。農業賃金労働者の貧しさに身を委ね、成す術のない様子は、抵抗できない声なきうさぎと同じように黙従を強いられる衰退した農民フアンとして体現される。その隷属は、20世紀まで影響の大きかったアリストテレス[96]の「動物は人間の目的に仕えるために存在し、人間が他の動物を支配する権利はあまりにも自明のことである」とする、スペインのインディアス支配についての主要な議論の一つであった自然奴隷説を彷彿させる[97]。すなわち小作人は地主のために存在する人間とは画された動物（うさぎ）である。内戦の敗者であり、姪のカルメンがラジオや狩りの道具などを勝手に触っていると「遠く、身の丈でないものに触るな」[98]と一喝する。奇跡の成長を遂げる産業ブルジョアを尻目に、農民は20世紀でも16世紀と同様の生活をしていたといわれている[99]。飢餓、旱魃、失業、乞食、幼児の死亡、性病、トラホーム、蠅、これらがスペインの農村を一口で言い表す言葉であった[100]。それはホセとルイスの勝者の側とフアンとのコントラストからも明らかである。

---

[95] “Si en vez de cazar le dierapor arreglar la parte de arriba... La tierra es buena. Se podría saber una cosecha decente. Pero eso a él no le importa”.

[96] 植物は食糧として動物のために存し、他の動物は人間のために存し、そのうち家畜は使用や食料のために、野獣はその凡てではなくとも、大部分が食糧のために、またその他の補給のために、すなわち衣服やその他の道具がそれらから得られるために存するのである。ピーター・シンガー『動物の解放』人院書院、2011年、235-236頁。

[97] 自然奴隷説は、理性が自らを支配するのに十分ではなく、ある人々は支配するよりも使えることの方が適しており、そのためスペイン人に占有されえたはず、というインディオに対するスペイン支配の正当性へとつながる。松森奈津子『野蛮から秩序へ　インディアス問題とサラマンカ学派』名古屋大学出版会、2009年、187-193頁。

[98] “no te toques los bienes ajenos e inpropios de la suya”.

[99] 斉藤孝、前掲書、24頁。またブラスコ・イバニェスの『葦と泥』では「マドリッド州にある村にもかかわらず、いまだかつて自動車を見たことがなく、電灯や蓄音機をまったく知らなかった。わずかな収入で悲惨な生活を送り、全ての村人が幽霊に以上な恐怖を抱いていた」とある。ブラスコ・イバニェス（高橋正武訳）『葦と泥』岩波書店、1978年、400頁。

[100] 斉藤孝、前掲書、20頁。

これら主要登場人物の「生きたままここで閉じ込められて焼かれている」[101]とする、閉鎖的な人間関係のミクロコスモスは、ピレネー山脈の向こうからやってきたマルクス主義を拒絶する伝統主義者たちであり、また国際社会から締め出されたフランコ体制の国際的孤立を表す。スペイン国内は、1950年代は開放、自由化、正常化といった言葉で表現され、内戦の敗者を社会に統合し、それは言説上だけのものではない。しかしながら包摂派と排除派の対立を中心の政治史が描かれることが多い[102]。また、勝者側にも矛盾と分裂が見られる。1960年代の奇跡の経済成長と近代化の過程で農村社会から産業社会に転換する際、伝統的な正統性が危機に陥る[103]。年配者たちはかつて同じフランコ派に一緒にいたが、現在は成功したり失敗したりの人生である。成功していない方のストレスがつのり、不安定な関係性から緊張をはらんでいき、関係に亀裂が入りだす。このように*La Caza*では、同時代のフランコ社会の権力、隷属、衰退、腐敗が、登場人物の社会階層に換喩されている。そして、それぞれ恋愛、社会的地位、経済的、実在的、性的な危機にあり、不十分な動機で根拠のない殺戮をする。そのためオープン・エンディングである[104]とされているが、メンバーが憎しみから殺しあっている事が明確であることから当てはまらない。

c）民衆としてのうさぎ

サウラの映画には、『カラスの飼育』（*Cría cuervos* (1976)）、*La madriguera* (1969)（（うさぎや狐などの）巣穴）、*Ana y los lobos* (1973)（アナと狼）など、表象として動物を扱うものが多い。狩りの獲物として値打ちがあったのは、勇猛さからイノシシで、美しさからシカであったが、*La Caza*でサウラはうさぎを選ぶ。*La Caza*には、うさぎ、フェレット、雌犬、豚、羊、蜘蛛、ピラニア、かえる、蠍、虫が出てきて、人間との相似で表象されている。そして身を守る術のない動物たちは、人間に踏みつけられる。これまで*La Caza*のうさぎは、共和派の兵士であるとされた。しかし上層部の殺し合いの文脈に関係なく、うさぎは大量に撃ち殺されていき、包括して扱われている。登場人物は皆前向きな人間ではなく、*La Caza*に英雄はおらず、ホセはラストシーンでイグサの間にうさぎのように身を潜め、借金と没落地主の屈辱、産業家への羨望に苛ま

[101] “nos estamos asando vivos aquí encerrados”.

[102] 武藤祥「1950年代におけるフランコ体制の岐路」『立教法学』第76号、280-328頁、283-284頁。

[103] 野上和裕「権威主義体制とスペイン歴史研究―フランコ体制について」『法学会雑誌』50、21-53頁、26頁。

[104] Monteverde, J.E., op.cit., p. 44.

れ怒る。そしてうさぎ穴に逃げる前に落ちていくまで打ち続ける。うさぎの表象はラストシーンでホセがうさぎと同じように死んでいくところからも、登場人物全員にも当てはまるといえる。うさぎの死骸にみられるように、うさぎは病気に罹っており、それは50年代に流行った疫病であるうさぎ粘膜症が背景にあるとされる。伝染性で、動物の皮膚、特に頭と生殖器に症状が表れ、器官を破壊する病気である。うさぎは結膜炎に苦しみ、失明し、高熱を出し、15日で亡くなる[105]。病気のうさぎは、ルイスの「そして皆うさぎ粘膜症に罹っているんじゃないのか？」[106]の台詞にあるように、そのまま3人の主要人物の心の病を表す。そしてうさぎの病はスペイン国民全体のトラウマを指すのである。

狩猟に来る際乗ってきたジープは、狩猟と同時に戦場の表象であり、各自所持しているピストルやライフル、猟銃[107]と共に集団殺人を表す[108]。猟犬は、1939年から75年までフランコ体制支持の一枚岩だった軍隊と武装警察（policía armada）と治安警察隊（guardía civil）であり、狩猟者の主導の下、うさぎ狩りの手先となる。狩猟者は死刑執行人であり、うさぎ狩りは内戦中の多くの処刑、爆撃、散歩（paseo）、内戦後の処刑と重なる。「うさぎを狩るにはいい日だ」、うさぎの穴だらけのうさぎの都市は、「殺すにはいい場所だ」[109]であり、晴れた日に市や教会に人々の集まる、ドゥランゴとゲルニカの無防備都市で、うさぎは非武装の民衆である。ヒトラーの全体戦争という戦争観念は、軍隊との戦争ではなく軍隊と全住民との戦争と規定されるものであり、ゲルニカは容赦なく爆撃された最初の無防備都市である。ドイツ空軍によるゲルニカに対する無差別爆撃は、第二次世界大戦で本格化する、総力戦を支える戦時経済や国民の戦意に打撃を与えるため、工場など生産の拠点だけではなく民衆の居住する市街地に対して加えられる戦略爆撃のさきがけとなる。ゲルニカ爆撃の新しい特徴は、焼夷弾で市街地を焼き、市民を殺傷する残虐性である[110]。野原に避難し逃げ惑う民間人に対して、低空から機銃掃射する無差別攻撃も肯定された。「うさぎ狩り

---

[105] Gómez, C., "Sangre, sudor y conejos un recorrido por la violencia subterránea en *La Caza", La Caza de Carlos Saura...42años después,* Valencia, 2008, p. 136.

[106] "¿Y si todos tuviésemos la mixomatosis?".

[107] Berton, J., *El mundo de las Armas de Caza,* Barcelona, 1994.

[108] Pérez Rubio, P., "Metáforas, metonimias: España como coto privado de caza", *La Caza de Carlos Saura...42años después,* Valencia, 2008, pp. 252-274, p. 273.

[109] "¿Eso es de la guerra?" "Aquí murió mucha gente. A montones murieron aquí. Ya ahora solo quedan los agujeros…" "Buen lugar para matar".

[110] 東京大空襲戦災資料センター編『東京・ゲルニカ・重慶―空襲から平和を考える』岩波書店、2009年、10頁。

は別におもしろくないが」[111]は、ゲルニカ爆撃で最新鋭の爆撃機に機銃掃射される民衆の殺戮でもある。「うさぎ狩りは不平等で非道徳的だ」[112]の台詞は、攻撃的ではなく無防備なうさぎ[113]と武装した人間の不均衡な戦いが、ゲルニカという無防備都市をドイツの最新鋭の爆撃機による無差別殺戮とパラレルであることを示す。

またドイツ空軍は産業ブルジョアのパコと重なる。ドイツ空軍にとってゲルニカ爆撃は、ヴェルサイユ講和条約により空軍の保持を禁じられていた後の、絶好の実験場となった。ゲルニカ爆撃での成果により、第二次大戦で活躍するドイツ空軍に成長する[114]。ファシズムの威信と力を内外に誇示するための機会となり、空軍大佐のゲーリングは「スペインでの空軍の使命は実験であり、開発された資材を実験でテストするチャンスだった」と明言している[115]。この「コンドル部隊」は、ブルジョアジー[116]としてスペインにおいて労働者を抑圧し続ける。「コンドル軍団の飛行士が未熟さゆえに犯した戦術的な誤り」とした[117]という反乱軍の主張は、痛痒なく労働者が大事にしているフェレットまでをも面白半分で試しに打ち殺す産業ブルジョアのパコとして顕れる。勝者の側であるホセとパコのうさぎの表現はファシズムそのものである。「弱者も身体障害者も生きる権利はない」[118]という台詞は、健康で強壮な者だけが生きる価値を持つとする典型的はファシズムの発言で、弱者たるうさぎが「唯一やることといったら隠れることだけだ」[119]と語る。フアンの手足が不自由でその身体的奇形は惨めさのイメージそのものなので、パコには我慢がならない。うさぎの皮を剥ぎながら「手足の不自由な人間には我慢ならない」「悪い運を与える」[120]「弱き者や欠陥のある者は生きていてもしょうがない。これは自然の法則だ」[121]と悪態をつく。また、

---

111 “la caza del conejo no tiene interés”

112 “La caza del conejo es injusto (inmoral)”.

113 “unos bichos inofensivos”.

114 川成洋、渡部哲郎『新スペイン内戦史』三省堂、1986年、174頁。

115 東京大空襲戦災資料センター編、前掲書、8頁。

116 ベン・マッキンタイアー（小林朋則訳）『ナチを欺いた死体―英国の奇策・ミンスミート作戦の真実』中央公論社、2011年、138頁、207頁。

117 ラッセル・マーティン、前掲書、56頁。

118 “ni los débiles ni los tarados tienen derecho a la vida”.

119 “Para el buen cazador, la caza del conejo no tiene ningún interés. Un bicho inofensivo que lo único que intenta esconderse”.

120 “no soporto a los tullidos” “dan mala suerte”.

121 “ni los débiles ni los tarados tienen nada que hacer en la vida. Es una ley de la naturaleza”

フェレットもしくはカラスがうさぎの目をまず襲う様子は[122]、クメールルージュ、タリバン、リビアなどの独裁的政権の、民衆に教育を受けさせ、知恵をつけてはいけないとする姿勢と似ている。そしてうさぎ狩りをし、獲物のうさぎを食べつくす様子、羊を隅々まで食べ搾取する家族たち、そして検閲により削除された、マタンサ（una matanza de un cerdo）を聖職者が取り仕切っている様子は、民衆への抑圧と搾取、そして内戦の黒幕ともいえるカトリック教会を現している。

うさぎの繁殖力についての表象も多い。「うさぎは無茶苦茶に増える。誰かがオーストラリアにうさぎを持って行こうと思いつき、そこにうさぎの外敵はいなかった。一組のつがいが三年で1500000匹に増えた。オーストラリアにはうさぎが多くいるあまり、山が動いているように見えるものもあるのを知っているか」と長い台詞に表れているように重要なトピックスである[123]。「うさぎとかえるは最も繁殖する動物だ」[124]「（うさぎは）人類を食べつくし、侵略し、新たな文明を形成するかも…そして階級闘争は無くなって…でもそのまえにかえると戦争するかもね」[125]からは子沢山な民衆、そしてなお国内に大勢いる排除されるべき側の共和派を表している。

d）ミソジニー

ミソジニーはサウラ作品に一貫して見られ、『カルメン』（*Carmen,* 1983）で顕著である。検閲で女性性により指摘され、削除された *conejo* から、また「うさぎには二つの子宮があり常に準備万端だ」[126]は、うさぎの子宮による女性性を示している。エンリケは獲物であるうさぎと同じように雑誌の扇情的な女性や双眼鏡でカルメンを見る。「うさぎは素晴らしい。特に若くて柔らかくてみずみずしければ」[127]。猟銃とナイフは男根を表し、女性たちを狩るとも理解できる。ミソジニーも主要なテーマで、生きている女性はカルメンしか出てこないが、

---

[122] リチャード・アダムス、前掲書、69頁。

[123] “Los conejos se multiplican una barbaridad...A alguien se le ocurrió llevar a Australia conejos, y los conejos no encontraron enemigos porque allí no hay alimañas. Se calcula que una sola pareja tuvo en tres años cerca de millón y medio de individuos. No sabéis que en Australia algunos montes parece que se mueven de tantos conejos como hay”.

[124] “los conejos y las ratas son los animales más se reproducen”.

[125] “se comerán al género humano, nos invadirán y formarán una nueva civilización...y la lucha de clases desaparecerá...pero antes tendrán una guerra con las ratas”.

[126] “tienen dos matrices y están siempre dispuestos”.

[127] “el conejo es una cosa maravillosa, sobre todo si es joven y tierno, la viveza que tiene...”.

見えない女性たちも重要な役割がある。エンリケ以外の登場人物は全員女性との対立的関係にある。ルイスは妻のルシアに棄てられたため、女性を嫌悪し軽蔑している。パコの妻は、バルでの写真にのみ現れるが、型にはまった、厳格で優美ではない老けた女性である。老いと旧い時代の衰え、恐らく性的不能への不安と自覚もあり「ただのそこら辺で日向ぼっこをしている老人の一人にしか見えない」[128]と、熱心に皺をみつけ、髪を梳き、クリームをつけ、強い男のイメージを演出したがる。パコの老いへの不安は、経済成長によりかえって基盤を切り崩すこととなったフランコ体制とフランコの性的不能の噂を表す。

ホセは旧時代の特権階級だったので、出自の低いパコのように金目当ての結婚をする必要がなく、「俺は生身の女の方がいい」[129]とマリベルの写真を見せる。パコは「若い女性はお前のためのものじゃない」と批判する。「女はピラニアのように貪欲だ」[130]「ピラニアは血のにおいをかいで、骨しか残さない」「大きな魚は子供を食べる」[131]と女の貪欲さを非難し、「フェレットは吸血鬼のようで、女性たちに似ている」「雄が欲情している時に雌が傍にいないと死んでしまうらしい」と恨みを募らせる。新しい世代のエンリケは「それだったら人間の男と同じだ」[132]と笑う。そしてミソジニーは、マネキンを銃で撃ち、焼き払い、そして女性であるうさぎを殺傷する欲へと転移する。離婚が認められフェミニズム第二波により女性解放が進むことへの男性側への脅威もあるのだろう。

e）SFと黙示録

ルイスの読んでいるSF小説は時代性を多分に表現している。地球滅亡の物語は、火事、疫病、洪水のように終末論的で、ファンにとっては最も恐れられ、期待されたものである。40年代、50年代の社会問題と人類の政治的問題を扱った作品に対して、星を征服できる高貴な能力は、冷戦の社会問題を正確に描写するのに用いられた別のタイプの文学である。SFの黙示録的な内容は、アメリカにより冷戦構造に巻き込まれていくスペインに身近でもある。ホセは「何と

128 “Parezco uno de esos viejos que toman el sol en cualquier espquina”.

129 “Yo las prifiero de carne y hueso”.

130 “con mujeres así se entiende lo de las pirañas”

131 “El pez grande se come al chico”

132 “los hurones son como vampires me refiero a los bichos, a los hurones, os habéis fijado qué cara tienen, se parecen a las mujeres” “Tienen cara de mujer, las hembras, los machos cuando están calientes se mueren si no tienen una hembra a su lado...eso dicen”.

言う日だ！　大地が燃えてしまうようだ！」[133]と言い、ルイスは破滅的なトーンで「そして陸地の三分の一が燃え尽き、樹木の三分の一が焼き尽くされて、青草は残すところなく焼き尽くされてしまった」とヨハネ黙示録[134]を暗誦し、「世界の終わりとはこのようなもので、煉獄の炎に焼かれるのだ」[135]と結論する。実際はスペイン人が匿名で執筆し、アングロ・サクソン人にカムフラージュしていたが、アングロ・サクソン人の文化を表象する、当時流行の頂点にあったSFに人々はのめりこむ。また経済成長により、またおそらく米軍基地設立により、北米の古い作品が入ってくる。それらは地球上の生物を破壊するなど終末論的である[136]。ルイスは熱心に『黒い惑星』(David Duncan, *El planeta negro* (1956))を読む。「第五惑星が、爆発し、隕石に吹き飛ばされた。月は爆撃され、地球は恐らくどこかの1エーカーか1マイル平方は破壊を免れた」[137]と音読し、パコはそれを「俺にとって何だっていうんだ！」と言葉少なく軽蔑する[138]。ルイスの余談には裏があり、結末の複線[139]もある。また台詞の中の隕石に吹き飛ばされ、爆撃されたくだりは、市街地の70%を焼失した1465人が死亡したとされるゲルニカとも重ね合わせることができる。マネキンを焼き、火が燃え広がり、窒息していく様を、ホセは高みの見物をしている。フランコは「ゲルニカの破壊は、赤（バスク側）が爆撃を利用して町にガソリンで火災を発生させたため」フランコ側は最初から調査を拒否し、見てみぬふりをし、「フランコの嘘」として覆い隠すが、それはそしらぬ顔をするホセによって表される。

f）骸骨

骸骨のシーンはサウラ自身の体験に基づく。モリスタス・デ・ヘタフェ小学

---

133 “¡Vaya día, parece que va a arder la tierra!”.

134 “Y quedó abrasada la tercera parte de la tierra; y quedó abrasada la tercera parte de los árboles... Y toda hierba verde quedó abrasado”.「ヨハネの黙示録」『新訳聖書』岩波書店、2004年、869頁。

135 “Así será el fin del mundo. Todos quemamos en el fuego eterno”.

136 Wyndhan, J., *El día de los trifidos,* 1951、Asimov, I., *El fin de la eternidad,* 1955が映画の中で言及されている。

137 “Hubo un quinto planeta y explotó, fue volado en pedazos, la luna fue bombardeada y lo mismo la tierra. Pedazos como montañas cayeron del cielo sobre la tierra y sobre la luna. Tal vez uno que otro lugar se salvo de la destrucción. Un acre o una anilla cuadrada, a miles de millas de distancia”.

138 ¡A mí qué!

139 Gómez, C., “Sangre, sudor y conejos un recorrido por la violencia subterránea en *La Caza”, La Caza de Carlos Saura...42años después,* Valencia, 2008, p. 139.

校の地下から兵士の死体が見つかり、友人と一緒に見に行った自身の記憶による自伝的なものである[140]。骸骨が共和派兵士を表していることについては、検閲及び公開直後の映画評ですでに指摘されている。「それは戦争の？」でエンリケはタブーを破る。「ここでは多くの、かなり多くの人間が死んで、今はうさぎ穴が残るだけだ」と答えている。2007年1月13日にはウエスカのファゴの村長ミゲル・グリマの死体が絶壁の奥から表れ、一ヵ月後グリマと常に争っていた森林と家畜の管理人サンティアゴ・マイナルが逮捕されるという事件もある[141]。2007年10月にスペイン歴史記憶法がフランコ期の迫害を公に認め、死者の身元識別、戦没者の谷で死者を弔うことが認められてもなおフランコ側は反対している[142]という現在ともつながる。ホセとエンリケのやり取りは、スペインはまだ埋葬されていない、死者の屈辱に閉じ込められていることを表している。ガルシア・ロルカは反乱軍に暗殺される直前に「スペインは世界でただ一つ、死を自然な光景とみなす国である」「スペインでは、世界のどの国の死者よりも、死人が生きている」と記している[143]が、骸骨は内戦の、今日もなお癒えない傷である。さらに重要なのは洞窟を「原子力施設なの？」(refugio atómico) という質問である。ブニュエルは内戦当時「人類は原爆か環境破壊によって破滅する」と予想し、その懸念は *La Caza* における原子力への揶揄と重なる。最初のシーンにも「コニャックを飲むと頭痛がするし、三杯も飲めばベッドに寝に行かなければならない」「それは原子力の放射能の影響だ」[144]という複線がある。SFの箇所でも上述したが、冷戦下での核への恐怖は、現在よりも生々しいものだった。今日も人々の生活を脅かす原子力は、支配者層に再び鍵をかけられ、隠されるのである。また、同じく穴の中にもぐりうさぎとフェレットが戦うのは、塹壕戦・白兵戦を表している。そして産業ブルジョアは傷だらけのフェレットを撃ち、地主のホセは「いつものように汚い手を使ったな」[145]と詰る。フェレットを使ってうさぎを狩るのは、支配者民衆同士で戦わせる常套手段である。うさぎやフェレットへの迫害は全て代理犯罪であり、産業ブルジョアは自分のために働く労働者をも無残に切り捨て、無責任に撃ち殺すのである。

---

[140] Hidalgo, M., op.cit., p. 146.

[141] Gómez, C., op.cit., p. 140.

[142] 加藤伸吾「スペイン「歴史記憶法」の成立過程（2004～2008年）」『外務省調査月報』4, 2-28頁。

[143] ラッセル・マーティン、前掲書、58頁。

[144] de coñac me carga la cabeza, a la tercera copa me tengo que ir a dormir". "Eso es extorsiona radiación atómica".

[145] "Has jugado sucio como siempre".

5．おわりに

サウラの *La Caza* については、その表象の複雑さが指摘されてはいるものの、うさぎ狩りが内戦であり、登場人物が地主、60年代からの産業ブルジョア、そして戦争を知らない新しい時代の若者、うさぎは共和派兵士であり、また女性性を表すという図式が定着しており、そこからの解釈が広がらないままである。本稿では、*La Caza* の軸となっているうさぎの表象を定義し、そしてスペイン現代史を概観することで、これまで認識されず、そしてサウラが説明しないまま留まっている隠喩を明らかにした。

第一にはうさぎは共和派兵士のみを表わすのではなく、内戦の敗者であるだけには留まらない。小作人であり、同じ側で戦い、協力しあっていたはずが、勝者の世代が重層構造を経て分裂し、産業ブルジョアに追い落とされる地主でもある。そして力がなく声なきうさぎのように、追い落とされ、意見することができなくなった側の人間であり、また無防備なままゲルニカの爆撃やバダホス虐殺事件の犠牲になった民衆である。窒息しそうな、狭い人間関係のミクロコスモスは登場人物のアミギスモだけではなく、国際的に孤立するスペインであり、また党派的なスペイン国内の互いを排除し合う雰囲気である。そしてスペインの民衆たるうさぎ自身がスペインを荒廃させてきたのである。閉鎖的な環境の中で緊張が高まっていき、ついに撃ち合いとなる様子は、19世紀の不安定な世紀から複数のスペインに分かれ、ピレネー以北からやってくる広がりを否定し、スペイン内戦が勃発する過程をなぞるようでもある。勝者の間での殺し合いは、共存の拒否と非妥協性を表すが、結局誰が勝者かわからない。またうさぎ粘膜症は、スペイン国民皆が埋葬できないままでいる内戦のトラウマを表している。老いと衰えを感じる主人公たちは、基盤が弱まりつつあったフランコ体制でもある。埋葬できない死体は今日的な問題であり続けている。内戦期の死の文化に表れるような、そしてその後のトラウマからの自滅願望もラストシーンに表れている。そして冷戦下における核爆弾への恐怖、原子力の放射能を意識しまた隠蔽するシーンは、内戦や60年代に留まらない現代に通じる普遍性がある。冷戦の核の脅威の前には地主もブルジョアも全員滅びるしかないこともラストシーンが示すところである。そして再生するうさぎの表象は、若い世代のエンリケへの希望をも表す。*La Caza* の表象は内戦に限定されず複合的であり、公開から46年経った今日もなおあらゆる解釈を可能とする、示唆の多い、歴史学の視点からも重要な作品なのである。